人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校としての点検・評価が組織的に行われ、ＰＤＣＡサイクルが有効的に機能している実践事例

１．基本情報

○都道府県名及び市町村名

兵庫県姫路市

○学校名

兵庫県立夢前高等学校

○学校のＵＲＬ

http://www.hyogo-c.ed.jp/~yumesaki-hs/

２．学校紹介

○学級数

【通常の学級】全学年各３学級、【合計】９学級

○児童生徒数

【全生徒数】３４８人（平成２５年１１月１日現在）
（内訳：１年生 119 人、２年生 111 人、３年生 118 人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【教育目標】
「人としての在り方・生き方を常に考え、自主的精神に満ちた人間の育成」

【人権教育に関する目標】
様々な活動や体験を通して、確かな人権意識を身につけ、共に生きる社会の構築に向け、主体的に取り組む意欲と態度を育む。

ア　「人権教育基本方針」（平成 10 年３月　兵庫県教育委員会）や生徒・地域の実態を踏まえて、人権教育全体計画や各領域の年間指導計画を作成する。

イ　人権に関するＨＲや講演会等を通して、今日的な人権問題に対する人権意識を高め、自立の精神、思いやりの心などを培い、身近な問題を主体的に解決する態度を育成する。

ウ　校内研修を通して、全教職員の共通理解と指導力の向上を図り、推進体制の整備・充実に努める。

エ　生徒に対する調査や教職員間の情報の共有・連携等を通して、いじめの実態を把握し、迅速・適切な対応に努めるとともに、生徒にいじめのない学校づくりへの啓発を進める。

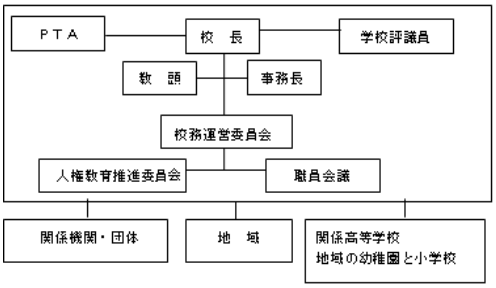
○人権教育にかかる取組の全体概要

(1) 人権教育推進委員会を中心とした組織的な取組

ア　構成　教頭、人権教育推進委員長、総務部長
　　総務部、各学年主任

イ　活動内容

・基本方針、人権 LHR 年間計画の立案
・校内研修会の企画・実施
・全教職員への研修内容の還元
・学年での取組・実施内容の共有化
・人権標語・作文等の作品募集やポスター等の掲示による啓発活動



・人権教育全体計画及び年間指導計画の点検・評価、見直し

(2) ＰＤＣＡサイクルを効果的に機能させる取組に向けた校内研修

・人権教育に係る点検・評価とその分析

・生徒の実態を踏まえた人権教育の在り方と全教職員による共通理解

・実践ごとのアンケート等による評価の実施と指導内容の充実、指導方法の工夫

(3) ＰＤＣＡサイクルによる取組

・「在り方・生き方」を考える講演会

・目標の実現に向けて取り組む『私の啓発録』の作成・実行

・共に生きる力を養う体験活動の充実

(4) 家庭・地域及び関係機関と連携した取組

・幼稚園　「ふれあい交流事業」

・小学校　「ふれあいカルタ大会」

・中学校　「地域スポーツ交流」

・ＰＴＡ　「交通マナーアップ作戦」

・高齢者　「高齢者宅訪問・高齢者福祉施設訪問」

・地　域　「クリーン・グリーン作戦」

３．特色ある実践事例の内容

◆　自らを律しつつ、共に高め合おうとする態度の育成

(1) テーマを設定した背景

本校生徒は、これまでの学校生活で学習や部活動等で成功体験が乏しく、何事に対しても明確な目的意識が持てないために、自信のなさや消極性が目立つ生徒が少なくない。

また、体験活動中でも困っている高齢者等を助けたいと思っても素直に行動に移すことができないケースも見られる。

一人一人の生徒が自律した高校生として有意義な３年間を送るためには、自分自身を唯一無二の大切な存在として捉えること、自分自身を見つめ自らの課題と向き合うことを通して人間的に成長することや他者の存在を認め他者と積極的に交流することによって他者理解を深めることが必要である。

そこで、生徒の自己有用感を高めるとともに、他者理解を深め、他者と協調しつつ自律的に社会生活を送るための実践力を養う。

(2) すべての学級が取り組む人権ＬＨＲ（年間５回以上）

ア　『私の啓発録』の作成・見直し・総括（発表）を通して、他者や地域社会とのあるべき関係や自らの高校生活を考える機会とするとともに、生徒の自己点検・評価による見直しを行い、人間的により高い成長につなげる。

イ　地域の教育施設等との交流を通じて人権教育の充実を図り、他者理解、自己理解を深めさせる。

(3) ＰＤＣＡサイクルによる具体的な取組

ア　「在り方・生き方」を考える講演会

①　目標設定

入学して高校生活を始めたばかりの生徒たちが、これから高校生活をどのように送れば良いかを考え、目標を持つことの大切さを理解する。

目標として、大きな目標『大目標』、それをかなえるための『中目標』、そのための小さくても毎日続ける『小目標』を立てる。定期的に振り返ったり、目標が実現し　新たな目標を立て努力したりすることは、自分を伸ばし夢に近づいていくことになる。

②　実行

・第１回「在り方・生き方」講演会　　平成24年４月16日（月）

講師　中家康博 氏（法務省　人権擁護委員、社人権擁護委員協議会会長）

・第２回「在り方・生き方」講演会　　平成24年10月３日（水）
講師　中家康博 氏（法務省　人権擁護委員、社人権擁護委員協議会会長）

③　評価

・各自が具体的な目標を持つことで、これからの高校生活を有意義に過ごすことができることや努力の積み重ねが自分の力となっていくことを理解した。
・人はみな同じでなく、性別、考え方、生活環境等が違っているからこそ、お互いに理解し合うことが大切であることを実感できた。

④　改善

目標を持つことの大切さを学んだ第１回「在り方・生き方」講演会後、生徒は半年間に渡って目標達成に向けて努力をしてきた。第２回「在り方・生き方」講演会では、半年間の取組を踏まえ、改めて現在の高校生活を見直すとともに、足りないところ、改善を要するところを生徒自ら考え、日々の生活に生かした。

イ　目標の実現に向けて取り組む『私の啓発録』の作成・実行

①　目標設定

各生徒が、現在の自分と向き合い、「自分に何が不足しているか」「どのような自分を目指すのか」等を観点に、自分自身にあった『私の啓発録』を作成し、自己を磨き、自らの将来や生き方について考える。

半年ごとに『私の啓発録』を自己評価し、見直し、新たな目標を立て実行するというＰＤＣＡサイクルによる取組とする。

②　実行

生徒一人一人が、独自の『私の啓発録』を作成する際、柱となる目標を三つ挙げて、それぞれの目標の根拠となる支持文も作成する。

年２回（10月、３月）、高校生活を振り返って、自己分析し、『啓発録』の５項目（稚心を去る、気を振う、志を立てる、学に勉める、交友を択ぶ）や自分が設定した三つの目標等について、10段階で自己評価する。

③　評価

・『私の啓発録』を作成し、実行し、見直すことで生徒自身が自分の足りないところや、やらなければいけないことに気づき、改善しようと努力するようになった。
・高校生活について、何事にも主体的に取り組むようになった。

④　改善

見直しの指標となる「第２回在り方・生き方」講演会後に自己評価を行い、達成できた目標はより高い目標に、改善すべき内容は、より具体的な計画を立てることによって、目標達成につなげた。

ウ　共に生きる力を養う体験活動の充実

①　目標設定

生徒が、三つの体験（交流芋掘り、クリーン・グリーン作戦、高齢者宅訪問）から一つを選択し、年齢の異なる人々とのふれ合いを通して、命を大切にする心や人間関係を築く能力、他の人の立場に立って考えられるような創造力等を育む。

②　実行

・交流芋掘りでは、生徒が育てたさつまいも畑を地元幼稚園に開放し園児と一緒に芋掘りを行った。芋掘りの後も、生徒と園児は、一緒にゲームをするなどして交流を深めた。

・クリーン・グリーン作戦では、通学路や夢前川河川敷周辺の清掃活動を行うことにより、学校周辺地域の環境美化に取り組んだ。
・近隣地域で一人暮らしをしている高齢者の自宅を生徒が、パティシエ倶楽部手作りのお菓子等を持って訪問し、地元の昔話を聞くなどの交流をした。

【園児との交流芋掘り】

【ゲームを通して園児と交流】

【クリーン・グリーン作戦】

【一人暮らしの高齢者宅を訪問】

③　評価
・自分中心の発想ではなく、周りの人たちのことを考えるなど、他者を思いやる気持ちなどが芽生えてきた。
・清掃活動をすることで、捨てたごみは誰かが必ず拾わなければならないということを改めて理解し、ごみのポイ捨てをなくし、この町を自分たちがきれいにしたいと思うようになった。
・一人暮らしの高齢者宅を訪問し、相手の話を傾聴することで、人の話をじっくりと聞く姿勢が生じ、相手を思いやる気持ちと自己有用感を育むことができた。

④　改善
・この三つの体験を踏まえ、生徒たちの変化を見ることで、次年度にいかにつなげていくとより効果的であるか全職員で考えることができた。
・幼稚園児との交流芋掘りについては、平成24年度は一つの幼稚園だけであったが、平成25年度は二つの幼稚園に拡大し、生徒の活動の場を充実させた。
・高齢者宅訪問については、近隣での一人暮らしの方が少なく、平成24年度に多くの生徒が交流体験できなかったことから、平成25年度は、高齢者福祉施設を訪問し、歌やダンスを披露したり、ゲーム等を一緒にして楽しく交流を図ることができた。

４．実践事例の実績、実施による効果

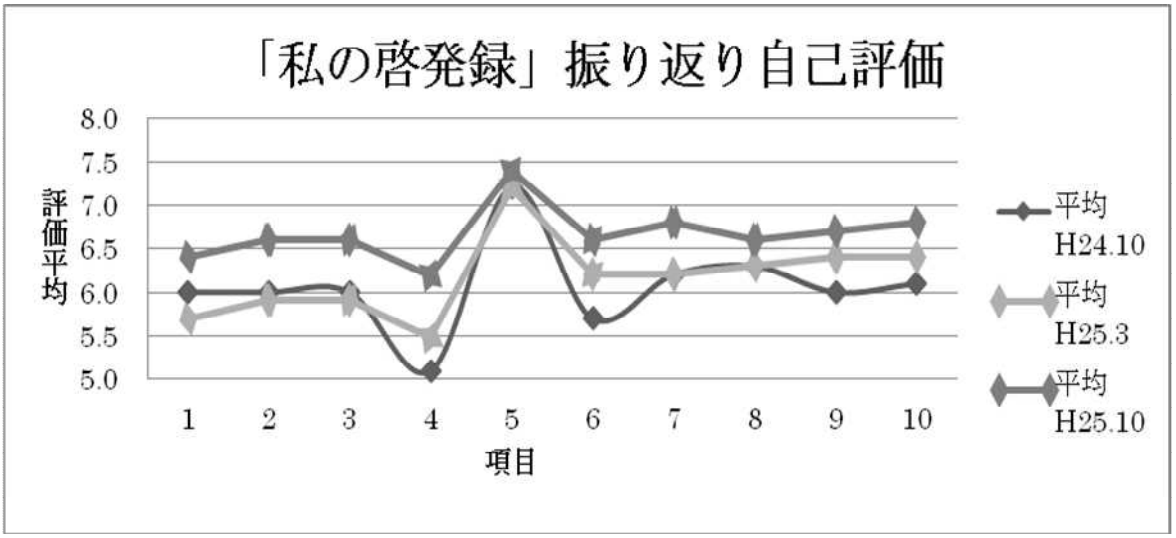
(1)　「在り方・生き方」講演会

・第１回の講演で、まず高校生活をどう過ごせば良いか、また、人としてどう在れば良いか、どう生きれば良いかを学んだことで自分勝手な考え方や行動とはどのようなものなのかを考え、知ることができた。

・第２回の講演で、高校生活を見直し、次の段階である他者理解について考えることができた。

(2)　『私の啓発録』の取組による生徒の自己評価　　(10 点満点)

振り返り自己評価	H24.10 評価平均	H25.10 評価平均	H25.3 評価平均	H26.3 評価目標
1 稚心を去る→どのくらい実行できたか。	6.0	6.4	5.7	6.8
2 気を振う→どのくらい実行できたか。	6.0	6.6	5.9	7.0
3 志を立てる→どのくらい実行できたか。	6.0	6.6	5.9	7.0
4 学に勉める→どのくらい実行できたか。	5.1	6.2	5.5	6.5
5 交友を択ぶ→どのくらい実行できたか。	7.2	7.4	7.2	7.6
6 自分が設定した項目１→どのくらい実行できたか。	5.7	6.6	6.2	7.0
7 自分が設定した項目２→どのくらい実行できたか。	6.2	6.8	6.2	7.0
8 自分が設定した項目３→どのくらい実行できたか。	6.3	6.6	6.3	7.0
9 総合して、どのくらい実行できたか。	6.0	6.7	6.4	7.0
10 自分で作成した「私の啓発録」を評価すると何点になるか。	6.1	6.8	6.4	7.0



・生徒の自己評価については、平成 24 年 10 月と比べて、全項目において評価が良くなっている。『私の啓発録』の見直しと自己評価を行うことで、より明確な目標ができ、それに向かって努力しているということが伺える。

(3)　体験活動を通した評価

・幼稚園児や高齢者等に対して、思いやりや優しさを自然と態度で示すことができるようになった。本校の農園に降りる階段では、園児がけがをしないように手をつないで見守ろうとする姿勢が伺えた。

・お年寄りの嬉しそうに話す様子を見て、話を真剣に聞こうとする姿勢が伺えた。

・地域のゴミ拾いをすることで、近隣の方に「ありがとう」と声をかけられ、とても嬉

しそうな表情であったことから、生徒の自己有用感の高まりを感じることができた。

(4) 学校評価による教職員の人権意識に関する自己評価　（５点満点）

		H24.10 評価平均	H25.10 評価平均	H25.3 評価平均	H26.3 評価目標
人権意識の育成	命と人権を大切にする心を育む講演会等を実施する。	3.1	3.5	4.0	4.2
	学年に応じた計画を立て、あらゆる機会を利用した人権教育を実施する。	3.2	3.3	3.7	4.0
	人権ＬＨＲや人権映画等を通して、人権を考え主体的に行動できる精神を育む。	3.0	3.3	3.5	3.7

・平成24年10月と平成25年10月の評価を見比べると、教職員の人権意識の向上につながっていることがわかる。平成26年３月の評価目標を達成できるように全教職員で取り組んでいきたい。

・平成24年度の取組後、野球部を中心に行っていた「地域の清掃ボランティア活動が、平成25年度には、野球部、ソフトボール部、ソフトテニス部などが率先して実施し、生徒の主体的な活動として広まりつつある。

(5) 研修会を通して全職員と共有化を図る。

各取組の準備から実施、反省等を報告することで、全職員と共有化を図り、次年度への計画につなげていった。

５．実践事例についての評価

・点検・評価を行い、ＰＤＣＡサイクルが有効的に機能したことにより、生徒たちに少しずつではあるが、自己有用感の高まりを感じることができた。

・『私の啓発録』は、５年目を迎えており、３年間を見通した実践へと発展しつつある。今後も、目標設定、実行、評価、改善を繰り返し、最終的には高校卒業後の将来に向けた『啓発録』につなげていきたい。

・１年生で交流芋掘り、クリーン・グリーン作戦、高齢者宅訪問等に取り組み、２年生ではこれらの体験を踏まえ、自己実現に向けたキャリア教育に移行していきたい。

・その他の実践として、幼稚園児との交流体育大会や交流文化祭、幼稚園児や小学生とのふれあいカルタ大会、中学生との地域スポーツ交流、地域行事におけるボランティア活動等を行っている。各学年等で行っている取組が単独で行われるのではなく、すべての取組の関連を図り、点から線への取組に発展させていきたい。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

兵庫県立夢前高等学校
人権教育において点検・評価を有効に機能させた取り組みである。実践事例としては、交流芋掘り、クリーン・グリーン作戦、高齢者宅訪問を通して、年齢の異なる人々とのふれあい活動などが紹介され、命を大切にする心や人間関係、他の人の立場に立って考えることができる学習活動が工夫されている。教育実践の過程で点検・評価が継続時に実施され、「人の話をじっくりと聞く姿勢」「相手を思いやる気持ち」「自己有用感」で生徒の自己評価が向上していることや、自己評価において教職員の人権意識の向上が確認されていることなど、目標設定、実行、評価、改善のサイクルを丁寧に実施した事例である。